

# 1 年生の大講義科目での遠隔授業の課題と展望

## ～必修科目「経営入門」を例として～

内 藤 勲

### 目 次

1. はじめに
2. 経営入門の位置づけと従来の授業進行
3. 経営入門の新型コロナ対応
4. 成績の変化
5. 遠隔授業の課題と展望

#### 1. はじめに

2020 年 1 月 15 日に国内での新型コロナウイルス感染が初確認されて以降、感染者数が増え、死亡例も報告され、政府をはじめとして日本社会全体が騒然とした。こうした動きに合わせて、愛知学院大学でも 2020 年 1 月 28 日に中国湖北省への渡航中止を呼びかけ、2 月 19 日には国内感染への注意を呼びかけ、3 月 3 日には 2019 年度学位記授与式（卒業式）の中止を発表するなど大学全体での対応が進められていった。3 月 16 日、17 日に実施予定であった在学生オリエンテーションと 4 月 1 日以降に予定されていた入学式と新入生オリエンテーションも中止された。新入生には時間と場所をずらしながら学生証が交付され、その際に愛知学院大学のポータルサイトである WebCampus の利用法が説明された。2019 年度終了段階では 2020 年度春学期は授業開始日を 4 月 6 日から 4 月 20 日に遅らせて従来通り対面授業を行う方針となった。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って、4 月 20 日から 5 月 2 日までの 2 週間は WebCampus を利用しての遠隔授業となり（4 月 8 日付け）、4 月 10 日の愛知県知事の緊急事態宣言を受けて 5 月 9 日までにそれを延長し（4 月 10 日付け）、春学期中の対面授業

の中止とマイクロソフト Teams 利用のライブ配信の遠隔授業（4 月 28 日付け）へと対応を変化させていった。最終的に春学期中の対面授業は行われず、春学期末の定期試験は原則として実施しないこととなった。

春学期が終了する 7 月には愛知県における新型コロナウイルス感染症の流行が沈静化していたため、秋学期の授業は従来通りの対面授業、あるいは学生の半数を登校させ半数をライブ配信遠隔授業とするハイブリッド授業で実施する方針であった。しかしながら、8 月に新型コロナウイルス感染症が再度拡大し、一部の実験・実習・実技科目、演習科目などを除く講義科目の遠隔授業での対応が決定された（8 月 21 日付け）。こうした大学の対応を受けて、1 年次生の必修科目である「経営入門Ⅰ・Ⅱ」（春学期開講科目のⅠと秋学期開講科目のⅡ、以後ⅠとⅡ両方を指すときにはローマ数字表記を省略し、「Ⅰ」も省略する）は通年で遠隔授業となった。

2020 年度の遠隔授業については、2020 年 3 月 24 日付けの文科省通知「令和 2 年度における大学等の授業の開始等について」に基づいて実施されたが、遠隔授業そのものについては以前より実施を認められていた。平成 13 年文部科学省告示第 51 号（大学設置基準第二十五条第二項の規定に基づく大学が履修させることができる授業等）では、次のいずれかの要件を満たし、対面授業に相当する教育効果を有すると

認めたものを60単位まで修得可能としている。

- ①同時かつ双方向に行われ、かつ、授業を行う教室等以外の教室、研究室又はこれらに準ずる場所において履修させる。
- ②毎回の授業の実施に当たって、対面やインターネットなどの適切な方法を利用して設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行い、かつ、当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保される。

2003年に実施された調査では通学制大学においてインターネットによる授業配信を実施している学部は16.5%、計画している学部は22.6%であったが、単位認定している学部は4.3%、計画している学部は5.6%と少数に留まっている。新型コロナウイルス感染症の流行以前は、制度はあっても導入に積極的な大学は少なかった。2020年度7月1日時点では遠隔授業のみの大学が23.8%、遠隔授業と対面授業の併用大学が60.1%にのぼり、新型コロナウイルス感染症の流行によって遠隔授業が一気に広がっている。秋学期においても全面的な対面授業実施大学は19.3%に留まっているので、遠隔授業実施が多数であることに変化はなかった。

愛知学院大学でも2019年度までは遠隔授業の活用についての議論が始まりつつあった状態で、遠隔授業のための環境や方法の導入は進んでいなかった。そのような状態での急な遠隔授業開始であったため、最初は大学・教員・学生間の情報交換のためのポータルであるWebCampusを利用するオンデマンドの授業を実施し、その後、マイクロソフト Teams を利用してのオンライン授業へと進んでいった。2020年5月に教員向けの Teams 説明会が行われ、教員、職員、学生皆が授業進行と共に遠隔授業に慣れていったのが現状であった。このような準備のないままの遠隔授業の開始であったが、2020年度の講義科目は遠隔授業で単位を与えることとなった。新型コロナウイルス感染症対策の進展に応じて来年度あるいは再来年度には対面授業に戻ると考えられるが、将来的には遠隔授業の活用は不可避の情勢である。その意味で、今回の遠隔授業の実態を過年度と比較

しながら振り返り、遠隔授業について、今、記録に残し、その課題と展望を考察することに意義があるだろう。

## 2. 経営入門の位置づけと従来の授業進行

経営学部の専門科目は学生の多様な学びを実現するために必修科目を3科目にしほっている。2科目が「経営入門Ⅰ・Ⅱ」と1科目が「基礎演習」である。経営学部の1学年定員は290名であり、毎年300名前後が入学している。一部の商業高校出身者を除いて新入生のほとんどは経営学を初めて学ぶ初学者であるため、「経営入門」は初学者である一年次生が二年次以降での専門科目の学びの基礎を身につけることを目標としている。「基礎演習」は二年次春に開講されて、二年次秋以降に受講する「専門演習Ⅰ～Ⅴ」などでの資料の収集・整理や資料作成の基礎を身につけることを目標としている。

経営入門ははじめて経営学を学ぶ学生を対象とした講義で、この講義を通じて1年次生が初歩的な経営学の知識の修得することを目指している。初歩的な経営学の知識の修得にとっては多様な概念や用語に親しむと同時に現実の企業経営に触れることが大切である。しかしながら、広範な経営学への入門として春・秋あわせて30回の講義で多様な概念・用語と現実の多様な事例を共に学ぶことは困難であるので、経営入門では多様な概念・用語を知り、使えるようにすることを主たる目標としている。経営入門Ⅰでは主に経営学の対象となる企業の姿(ガバナンス)と仕事の内容別の経営管理(管理論)を対象とし、経営入門Ⅱでは主に企業経営の基本方針の定め方(戦略論)と働く人々の協力関係の作り方(組織論)を対象としている。

毎年300名程度の新生に過年度の単位未修得者を加えて経営入門の履修者数は350名を超えるため、例年2つのクラスに分割して開講している。経営学部の教員9名(内、1名は定年退職、1名は転籍し、現教員は7名)で執筆した『はじめて出会う経営学』(中央経済社刊)をテキストとし、原則として1回の授業で1章

の内容を学ぶ進捗で進めてきた。講義ではパワーポイントを利用してテキストの内容と共に、補足する概念や説明を追加して解説している。講義終了時にその日に学んだ内容を振り返るための小テスト（250 字程度の記述回答）を実施し、その評価を平常点としてきた。この平常点と期末テストの点数を用いて成績評価を行っていたので、遠隔授業においても同じ基本方針で講義は進めた。

### 3. 経営入門の新型コロナ対応

2020 年度春学期の授業開始が 4 月 20 日となり、5 月 2 日までは WebCampus を利用して対応することとなったため、必修科目の経営入門も WebCampus を利用して資料を配付し、学習成果をネット経由でフィードバックする形で始めることとなった。受講生は過年度生が 76 名（内、13 名が春学期中に退学）、新入生が 307 名であった。

WebCampus は添付ファイルの種類や容量の制限があり、受講生が対応できるファイル形式が確定できなかったため、配布文書は pdf ファイルとし、動画は Youtube を利用した。新入生のオリエンテーションも WebCampus を利用したものとなり、WebCampus の利用法については学生証交付時の短時間となった。そのため、第 1 回の授業は新入生が対応できるかどうかを確認するために WebCampus の添付ファイルに「講義の進め方」解説動画（Youtube 動画）のリンクと受講状況についてのアンケート（Google フォーム）のリンクを掲載し、受講生からのフィードバックに基づいて 2 回目以降の授業進行の資料とした。動画とアンケートのリンクについては WebCampus の通知文書にも掲載した。また、あわせて WebCampus のコメント機能を使って簡単な課題への回答を集めて、5 月まではこれを出席確認に用いた。第 1 回の授業の出席率は 91.9% であった。ただし、新入生の出席率は 97.7% と高く、過年度単位未修得者の出席率が 68.4% と低い値であった。単位未修得者には受講態度が悪い者も少なくない。本稿は 1 年次生への対応に焦点を合わ

せているので、以下では新入生のみを対象として議論する。

WebCampus で回答した出席者は 300 名で 7 名が回答しなかった。アンケートへの回答者は 299 名で 8 名が回答しなかった。WebCampus もアンケートも未回答の学生は 3 名であったので、新入生のほとんどが WebCampus 経由での資料配付による受講が可能であったと考えられる。アンケートの結果を見てみると、解説の動画を視聴できた学生が 93.3%、講義資料を確認できた学生が 98.3% であった。動画が視聴できなかった学生が 2 名、講義資料をダウンロードできなかった学生が 2 名、ダウンロードできたが読めなかった学生が 3 名いたが、出校できない状況であったためフォローはできなかった。

パソコンあるいはタブレットを持っていて、プリンターで印刷できる学生が 51.5%、スマートフォンのみだが、プリンターで印刷できる学生が 10.0% で、印刷できる学生が 6 割を超えていた。また、パソコンあるいはタブレットを持っているが、印刷できない学生が 25.8% おり、パソコンあるいはタブレットで資料確認できる学生は 3/4 を超えていた。通信回線については、高速回線があり、有線あるいは Wi-Fi で利用できる者が 84.9%、モバイル Wi-Fi ルータを利用できる者が 12.0% でほとんどの学生の通信環境は悪いものではなかった。マイクロソフトワードの使用に関しては、レポート作成ができる学生が 11.7% しかおらず、簡単な文書程度なら作れる学生が 45.8% いて、使ったことがない学生が 42.5% もいた。メールについても、ファイルを添付してメールを送れる学生は 41.1% しかおらず、メールは送れるが、ファイルを添付できない学生が 23.1%、メールを送ることができない学生が 35.8% であった。メールに添付してワードを用いたレポートを提出させることは実施しないこととした。

第 2 回目から第 6 回は WebCampus へ講義連絡を添付し、その中に下記の内容で学習の進め方を指示した。

- 1) 添付ファイルの「テキスト」をよく読んでください。

- 2) 添付ファイルの「講義資料」を印刷してください。  
プリンターのない人は講義資料を見ながら、ノートに転記してください。
- 3) 印刷した(あるいは書き写した)講義資料を見ながら、リンクの動画を視聴してください。
- 4) 講義の内容を十分理解した上で以下の課題を行ってください。
  - ・400～800文字程度のレポート課題
  - ・クイズとレポート提出のGoogleフォームへのリンクで回答する。
- 5) WebCampusのコメント機能を使って出席確認の課題を提出してください。

動画で使用するパワーポイントシート(pdfファイルに変換)を講義資料とし(3回目以降は重要語句を白抜きしたもの)、パワーポイントのスライドショーの記録機能を用いて講義動画を作成し、YouTube動画として視聴できるようにし、リンクを配信した。

2年次以降の学生向け応用科目において、スタジオでパワーポイントの映像の前で教員が解説する動画とパワーポイントのスライドショーだけの動画の視聴しやすさを評価してもらった。「身振り手振りと一緒にスライドを確認できるので、わかりやすかった」「実際に学校で授業を受けているような感じで受けることができた」「先生の体の表現がより理解しやすく良かった」という評価が圧倒的に多かったので、経営入門Ⅰも第6回以降はパワーポイントをプロジェクター投影した前で解説する形式とした。

6月以降は大学の方針に従ってTeamsを用いてのオンラインライブ授業とした。課題についてもメディアをGoogleフォームからMicrosoft Formsに変更して同様に継続した。春学期のオンライン授業で混乱はほとんどなかったもので、秋学期もパワーポイントシートを投影した前で解説するスタジオ形式のオンライン授業を実施し、Microsoft Formsで課題を集める形で行った。

GoogleフォームおよびMicrosoft Formsで提出させた課題は、複数選択可能な選択肢問題

(6選択肢)を3題、択一選択肢問題(4選択肢)を3題、300字以内で記述する授業内容の振り返り問題、600字程度で記述する企業の実態に関する調査レポートを基本的なパターンとした。

複数選択は次のような問題で、この場合正解はB、E、Fとなる。正解の選択肢に対して1つ2点を与えた。正解の選択肢が3つの場合、満点は6点となるが、すべて選択した場合は減点とした。

競争についての記述で正しい記述を選びなさい

- A) 伊藤園はセブンイレブンと顧客を奪い合っている
- B) サントリーは麒麟と利益を奪い合っている
- C) トヨタはJR東海と利益を奪い合っている
- D) ソフトバンクは新規参入した楽天と利益を奪い合っている
- E) アマゾンと三越は顧客を奪い合っている
- F) ホンダは日産と顧客を奪い合っている

単一選択は次のような問題で、正解に対して3点を与えた。この場合、①が事業部制組織、②がマトリックス組織、③が職能部門制組織、④がプロジェクト組織なので正解は②となる。

マトリックス組織の説明を選びなさい

- ①業務遂行に必要な機能と利益責任を、製品別、顧客別又は地域別にもつことによって、自己完結的な経営活動が展開できる組織である。
- ②構成員が、自己の専門とする職能部門と特定の事業を遂行する部門の両方に所属する組織である。
- ③購買・生産・販売・財務など、仕事の専門性によって機能分化された部門をもつ組織である。
- ④特定の課題の下に各部門から専門家をまとめて編成し、期間と目標を定めて活動する一時的かつ柔軟な組織である。

授業の振り返り問題は、「企業観とCSRの関



係について 300 字以内でまとめなさい。」「トヨタ生産方式の二本柱について 300 字以内でまとめなさい。」「戦略学習と現場学習の関係について 300 字以内でまとめなさい。」「(リーダーシップの) 行動論と状況論の共通点と相違点について 300 字以内でまとめなさい。」というようにテキストを読んで授業内の解説を聞いていれば答えられるものである。

企業の実態について調べる問題については学生一人一人に異なる会社を割り当てて学生間でのコピー＆ペーストができないように配慮した。春学期には 5 月 1 日時点で JASDAQ 上場している ROA 上位の会社をリストアップし、「自分の担当する会社の CSR 活動を調べて 600 字程度にまとめなさい。」「担当している会社の販売促進について 600 字程度にまとめなさい。」のような課題を出した。秋学期には 3 種類の企業を割り当てた。ベンチャー企業のフォースタートアップス株式会社が提供するベンチャー企業リストの注目度の高い企業をリストアップした「自分が担当しているベンチャー企業の社長(あるいは創業者)が起業家としてどのような人物であるか 600 字程度にまとめなさい。」のような課題, 2019 年度と 2020 年度に中小企業庁が選定したはばたく中小企業・小規模事業者 300 社を対象とした「自分が担当する中小企業の規模や歴史・創業者などについて 600 字程度にまとめなさい。」のような問題, 直近の決算での営業利益率の高い東証 1 部上場企業(持ち株会社を除く)をリストアップした「自分が担当している上場企業の企業戦略(全社戦略)について 600 字程度にまとめなさい。」「自分が担当している上場企業がどのような組織形態であるか 600 字程度にまとめなさい。」のような課題を出した。

#### 4. 成績の変化

2019 年度までの成績評価は講義毎の小テストで評価する平常点を 30%, 期末試験を 70% として評価してきた。期末試験は穴埋めの単語を記述する問題を出していた。2020 年度は期末試験を対面で実施できなかったため、Google

フォームないし Microsoft Forms で提出させた課題の点数を平常点とし、Microsoft Forms を利用したネット試験を実施して、平常点 80%, ネット試験 20% で評価した。ネット試験は 2019 年度までと同様に穴埋めで単語を記述する問題で実施した。

期末試験に関しては、表 1 に示したように、2019 年度までは年々平均値も標準偏差も増加傾向であった。問題の水準は変更していないので、平均的に期末試験の成績が向上すると共にできる学生とできない学生の差が大きくなっている。ただし、図 1 に示した累積分布のグラフからも分かるように、両極分化しているわけではない。2020 年度のネット試験は試験中の参照が可能であり、ネットでの検索も可能であるので学生にとっては容易になると予想された。問題の水準は変えずに問題数を増やし(2019 年度までは 42 題, 2020 年度春は 50 題, 秋は 55 題), 回答時間を 45 分に減らしたが、それでも平均値は大きく増加し、標準偏差は大きく減少した。平均して高得点で、差がつきにくい試験となった。

また、2019 年度までは春学期よりも秋学期の平均値が高く(いずれの年度も 1% 有意)、春学期よりも秋学期の標準偏差が大きい(2017 年度は 1% 有意, 2016・2018 年度は 5% 有意, 2019 年度は 10% 有意)。それに対して 2020 年度においては、平均値は春学期よりも秋学期の方が高いものの(1% 有意)、標準偏差は秋学期の方が小さくなっている(1% 有意)。2019 年度までは多くの学生が成績を向上させる中で成績を上げられない学生も多かったと思われるが、2020 年度は多くの学生が成績を向上させ、特に成績の悪い学生の向上が大きかったと思われる。ネット試験への慣れと試験対策の結果、差がつきにくくなったと思われる。

平常点に関しては、2019 年度までは授業最後の振り返り小テスト 1 問であり、差がつきにくく、ほとんどの学生が高得点であった。2020 年度は Forms の課題にクイズ形式の問題を出すと共に、記述式の課題も 2 題としたため、得点は低くなっている。2020 年度春は明らかに標準偏差が大きい、これは Forms での課題への解答の慣れの速さに違いがあったと推測し

表1 期末試験の平均値と標準偏差

	2016春	2016秋	2017春	2017秋	2018春	2018秋	2019春	2019秋	2020春	2020秋
平均値	27.6	34.1	28.4	35.4	33.8	42.7	37.3	45.0	64.6	77.0
標準偏差	16.7	19.1	17.7	21.0	19.0	21.6	20.0	22.1	17.2	14.6

図1 期末試験の成績累積分布

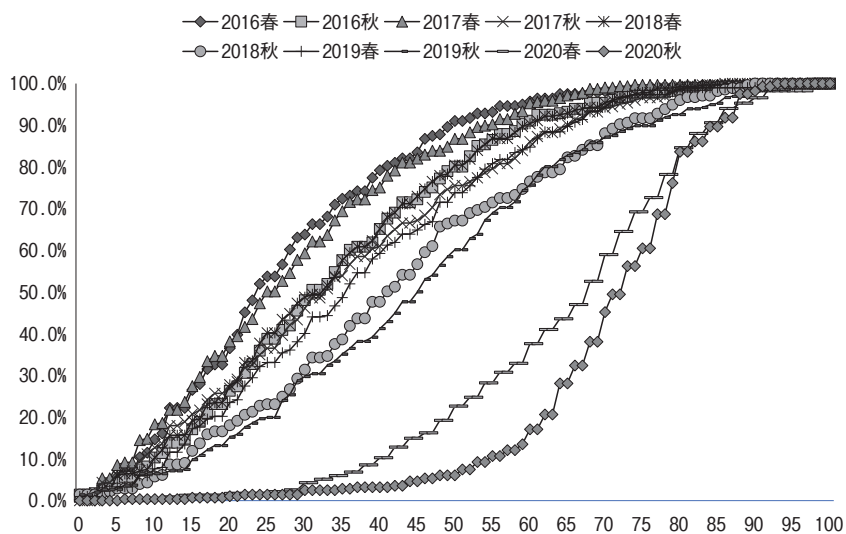


表2 平常点の平均値と標準偏差

	2016春	2016秋	2017春	2017秋	2018春	2018秋	2019春	2019秋	2020春	2020秋
平均値	90.5	89.6	91.9	91.8	92.5	90.9	91.7	88.4	79.3	68.6
標準偏差	11.6	10.5	12.2	10.0	12.7	12.6	11.1	14.3	17.1	11.0

図2 平常点の累積分布

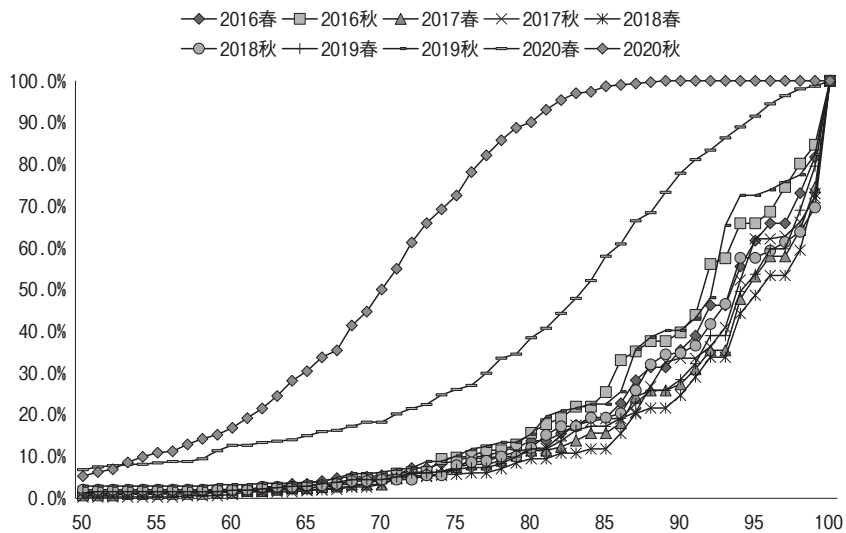
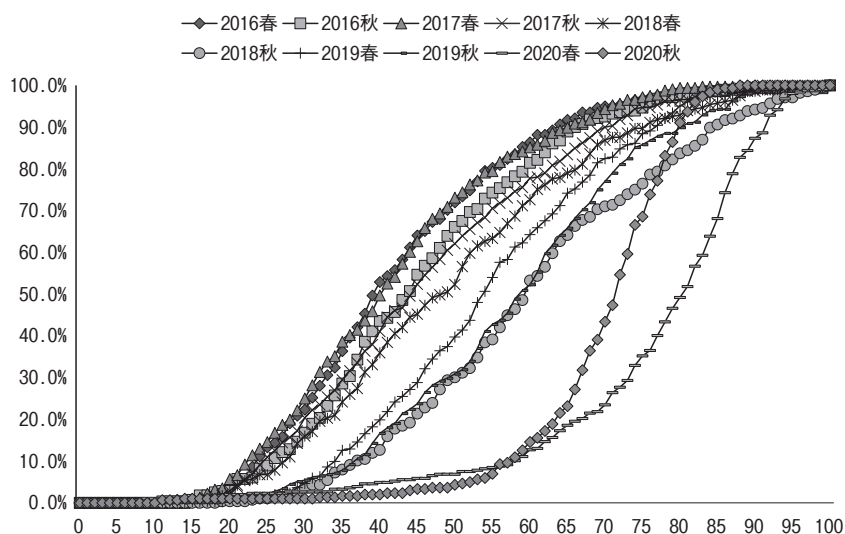


表 3 総合評価の平均値と標準偏差

	2016春	2016秋	2017春	2017秋	2018春	2018秋	2019春	2019秋	2020春	2020秋
平均値	42.6	45.6	42.3	46.6	49.8	60.7	55.0	58.3	76.5	69.8
標準偏差	15.6	16.1	15.7	17.0	18.1	17.7	15.8	16.5	16.3	10.8

図 3 総合評価の累積分布



ている。図2に示したように、2019年度までの平常点は差をつける評価ではなく、出席者の総合評価の底上げ効果が主であった。それに対して、2020年度は平常点でも学生の学びの違いを評価できているように思われる。

平常点と期末試験（2020年度はネット試験）で産出した総合評価については、表3に示したように、2019年度までは年々平均値が向上しており、春学期よりも秋学期の平均値の方が高くなっている（いずれも1%有意）。2020年度は前年度よりも平均値は向上しているが、秋学期の方が春学期よりも平均値が下がり、標準偏差がかなり小さくなっている。総合評価の平均値の低下は平常点の評価の比率を大きくした結果であろう。

突然の遠隔授業・遠隔試験対応ではあったが、卒業要件の単位を与えるための成績評価としての問題は生じなかったし、成績の差を付ける根拠も得られた。しかしながら、対面時と比べて学生間の差が出なかったことも事実である。遠隔授業・遠隔試験での評価については課題が明らかとなった。

## 5. 遠隔授業の課題と展望

新型コロナウイルス感染症の突然の流行に端を発した2020年度の遠隔授業対応は多様な工夫をする余裕はなかった。しかしながら、毎回毎回の授業進行と共に教員のみならず学生も経験を積み、より良い遠隔授業の進め方、より良い遠隔授業の受け方（学びの質と労力の削減）を会得してきたようにも思う。新入生の大人数クラスの授業を行う必須科目として、経営入門では以下のような工夫を凝らした。

- ① パワーポイントシートを投影した前で解説する授業スタイル
- ② Microsoft Stream にアップロードして授業後に視聴可能な授業の記録動画
- ③ 授業内容を振り返る Microsoft Forms 課題
- ④ 個々の学生に異なる企業を割り当てて調査する課題
- ⑤ Microsoft Forms を利用したネット利用の期末試験

①については、学生へのアンケート結果で明らかのように、受講生の集中を維持する上で良い対応であった。ただし、多くの教員が実施するには、教室での授業を簡単に配信できる設備や遠隔授業用のスタジオ設備などの充実が必須であろう。

②については、わかりにくい部分を繰り返し視聴できる点では、学習意欲の高い学生には良い工夫であるが、いつでも見ることができるという安心感でオンライン授業を真剣に聴かないという弊害もあった。オンライン授業の記録ではなく、自学自習を補助する別の動画での対応がより望ましかったと考えられる。しかしながら、そのような対応のための動画作成の設備と時間の確保が大きな壁である。教育内容の見直しも含めて、学外教育資産の利用も視野に入れる必要がある。

③については、オンライン授業あるいはオンデマンド授業の積極的な視聴を誘導したので、良い工夫だったと自己評価している。ただ、学生アンケートでは量が多いという指摘があったので、他の科目と連携しながら課題の量をコントロールすることも必要に思われる。学生への個別の迅速・頻繁なフィードバックが学生の理解を深めるために重要であるが、残念ながら実施できなかった。大人数科目での簡便な個別フィードバックのノウハウ蓄積が必要である。

④については、学生が受動的に授業を聴くだけでなく、調査という形で能動的な学びの機会を増やしたので、良い試みであった。しかしながら、三百数十社の異なる調査結果が正しいかどうかを毎週確認することはできず、ランダムな抜き取りでしか確認できなかった。学期中に1・2回に回数を減らせば全員の確認は可能であろうが、学生に調査させるという機会は大きく減少する。学生が提出した調査内容の確認視認の工夫が必要である。

⑤については、評価して成績を付けるという目的では、点数の差が出なかったためさらなる工夫が必要である。参照を前提とした出題方法・問題数や正答率に応じた傾斜配点、評価のための試験の回数など課題は多い。

対面授業であっても、出席している学生すべてが授業を真剣に聞いているわけではない。居

眠りする学生やスマホで遊んでいる学生など多い。対面であっても大人数の授業では受講生一人一人を見ながら講義を進めることは困難である。遠隔授業を実施してみて、知識移転型の授業であれば受講する学生の姿勢次第という意味で遠隔授業と対面授業の差はそれほどないように感じた。しかしながら、対面授業では真面目に授業を聴いている学生の表情やノートをとる様子から授業進行をコントロールできるが、遠隔授業では受講生の表情を見ながら解説を変えたり、例を追加したりするコントロールができない。その点では遠隔授業よりも対面授業の方が優れている。他方、教室定員にかかわらずクラスを編成することができ、オンデマンド型であれば受講時間をフレキシブルにできるという点では遠隔授業にも利点は存在する。

教育の手段として、対面授業と遠隔授業、オンライン授業とオンデマンド授業が異なっている以上、従来の対面授業やその際の成績評価をそのまま遠隔授業に持ち込むことはできない。オンライン授業の場合、対面授業と同様の90分を前提とするので、対面授業と同様に学生の集中を高める努力が必要になる。他方、オンデマンド授業であれば必要な部分だけを繰り返し視聴できるのでそのような工夫は不要となる。むしろ、必要な箇所を視聴しやすいように動画をいくつか分割して提供するような工夫が必要となろう。

ネットでの試験に関しては学生がテキストやネット情報などを参照できると同時に、学生同士も連絡を取れるために、対面時と同様な内容や時間配分ではネット試験などの得点差は小さくなる。ネット試験では資料参照を前提とする試験内容が求められる。また先に述べたように、学期中のネットを利用した課題提出は評価のためだけでなく、受講生の理解度を知り、教育効果を高めるためのものである。遠隔授業の際には内容や回数のみならずフィードバックについても工夫が必要になる。

新型コロナウイルスの流行という突発事象への対応としては、2020年度の遠隔授業・遠隔試験の対応は課題は多いが成功したものと評価している。新型コロナウイルスの収束後にも教育にICTを活用する流れは継続する。今回のオン



ライン授業やオンデマンド授業，ネットでの課題提出，ネット試験などの経験を今後にも活かすことが肝要であろう。